

日本人が信じているもの

渡辺康磨

わたなべ やすまる / 1935年東京生まれ。慶應義塾大学経済学部卒業後、日本テレビのプロデューサーとして活動。その後、ドイツ、ミュンスター大学に留学。玉川大学教授、立正大学教授を経て、現在、昭和女子大学非常勤講師。生涯学習セルフ・カウンセリング学会会長。著書は『自分を見つける心理分析』（講談社）、『セルフ・カウンセリング／ひとりでできる自己発見法』（ミネルヴァ書房）など多数。

わたしが小学生のとき、日本は敗戦を迎えました。戦争中、学校の先生は、「天皇陛下のために死ぬことがもっとも価値ある生き方だ」と説きました。ところが、その先生は、戦争が終わった翌日から、「民衆のために生きるべきである」と説くようになりました。

簡単に自分の信じていることを変えた先生に対して、わたしは、「おそらく、先生は天皇も民衆も、本当には、信じていないのだろう。とすると、先生は、何を本当に信じているのだろうか」という疑問を抱きました。この先生に限らず、ほとんどの日本人が、このように、戦前の生き方を簡単に捨て、アメリカから入ってきた新しい生き方を受け入れていきました。そのときの体験が強く心に残っていたわたしは、日本人が抛りどころとして本当に信じているものを、しっかりと突きとめたい、と思つうようになりました。

まず、手始めに、わたしは日本の諺を調べてみました。諺のうちには、普通の日本人の意識が集約してあらわれていると思つたからです。

調べてみると、日本の諺には、「まわりに合わせて生きる」と教えているものが多いことに気づきました。「長いものには巻かれよ」「奇りば大樹の陰」出る杭は打たれる」など、例を挙げればきりがありません。どの諺も大勢に順応することをすすめています。その反対に、

“自分の信するところを貫いて生きよ”と教えているような諺は、まったくといってよいほど、見当たりませんでした。

そのころ、ある人気コメディアンのことばが流行しました。「赤信号、みんなで渡れば怖くない」というそのことばこそ、日本人の生き方の的を射ていることばだ、とわたしは思いました。

日本人が信じているのは、この“みんな”なのではないでしょうか。この“みんな”は“世間”という替えることもできます。戦前、日本人は、「世間様」に後ろ指を差されないように、「世間の物笑いの種」にならないように、「世間」といって、子どもをしつけました。この“世間”ということばを、もう少しきちんといあらわすならば、「社会的評価」といい替えることができるでしょう。

後年、わたしは、「現代日本人の自己形成」を自分の学問的研究課題とするようになりました。

わたしたち日本人一人ひとりが、世間の評価のとられから自由になって、かけがえのない人格として生きることができるようになることを願ってきました。そして、わたしは、セルフ・カウンセリングというひとりでできる自己発見法を創り、自己発見運動を展開してきました。



目次

SEPTEMBER 2007 9
月刊みんぱく

01 エッセイ 世界へ世界から
日本人が信じているもの
渡辺 康磨

02 特集 オセアニア

海と島とカヌー
印東 道子

カヴァで語り合う
吉岡 政徳

オーストロネシアン
—ことばで結ばれた人びと—
菊澤 律子

タヒチのタタウ

桑原 牧子

オセアニアの災害文化

林 勲男

「ホエール・ライダー」と
マオリ社会

内藤 暁子

08 モノ・グラフ

ジョージ・ブラウン・コレクション

林 勲男

10

地球ミュージアム紀行
帆の都市のミュージアム
ピーター・J・マシウス

11

表紙モノ語り
タノアを囲んで
白川 千尋

12

みんぱくインフォメーション

14

万国津々浦々
アーミッシュの人びととのコミュニケーション
—アメリカ合衆国における静かな試み—
鈴木 七美

15

人生は決まり文句で
あいまいな「アーマイ」
磯貝 日月

16

外国人として生きる
人権活動家として、格闘家として
庄司 博史

18

地球を集める
ングルンデリの神話
松山 利夫

20

生きもの博物誌
オットセイの受難
和田 一雄

22

フィールドで考える
失せ物を探すには
岡部 真由美

24

開館30周年記念事業のご案内
次号予告・編集後記